本の虫～１１月の図書館～

姫林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
本の虫～１１月の図書館～

【Ｎコード】
Ｎ１８１３Ｄ

【作者名】
＊姫林檎＊

【あらすじ】
もう肌寒い１１月の朝。朝練で部室へ行くと、ベンチに座って本を読む近藤君がいた・・・。

カレンダーをめくり、もう１１月なんだ　とため息が漏れた。

ついこの間高校生になったような気がする。

ついこの間近藤君と知り合った気がする。

あの夜　近藤君の隣で隠れて泣いたあの日が

昨日のような気がする。

１ヶ月前のことなのに。

近藤君の気持ちが本の中の女の人へ向いていたとしても、きっと私のほうがそばにいる。

それだけでじゅうぶんだと思うことにしよう。

制服を着て、外に出る。

もうかなり肌寒くて、少し前に制服も冬服に完全移行していた。

既にセーターやカーディガンを着てる人も多い。

マネージャーは制服で朝練に参加してもいいからジャージで外を歩かないで済むのがうらやましい！ってテニス部の女子が言ってたのを思い出し、１人で笑った。

確かに、近藤君の前でジャージは着たくないかも。うちの学校のジャージってダサいし。

そんなことを考えてるうちに学校に着いた。

グラウンドには誰もいなかった。

と、思ったら部室に近藤君がいた。

近藤君はベンチに座って本を読んでいた。

寒いのに集中していて、私には気づかない。

思わずくすりと笑った。

それでようやく近藤君は顔をあげた。

「あぁ、おはよう。」

「おはようございます。朝から何読んでるんですか？」

「んー、昨日の夜ちょっと読んだら止まらなくて。気づいたら寝てたんだけどね」

表紙を覗き込むと見たことのない小説だった。

「誰の本ですか？」

「よくわからない。図書館で見つけて適当にかりたんだ。でもおもしろいよ」

「へぇ」

相槌をうって、それ以上話しかけるのはやめた。

本当に本を読みたい時、邪魔はされたくないものだってことが私にはよくわかってた。

だから話しかけたりはせず、隣に座ってボールにういた土を取ることにした。

小さなボールを1つずつ撫でる。

「・・・爪に土が入るよ」

近藤君がぼそりと呟いた。

「平気です。」

「・・・そっか」

近藤君は本を閉じるとかばんに閉まって背伸びをした。

「読み終わったんですか？」

「ううん、きりがいいからやめておいた。そろそろ準備しなきゃね」

そう言って近藤君は笑うと『寒い』といって震えた。

「カイロありますよ？使います？」

「ううん、平気。どうせ走ればあったまるし。」

近藤君は立ち上がってあくびをした。

その瞬間、ふわりとオレンジの優しい甘いにおいが鼻の中に広がった。

「・・・いいにおい」

思わず言うと近藤君が不思議そうにこちらを見る。

「近藤君、オレンジのいいにおいがする。」

「あぁ、朝食べてきたし・・・飴も舐めてるしね」

そう言って近藤君は笑った。

「私、近藤君のそのオレンジのにおいって好きなんです。なんか落ち着く」

「そう？飴、いる？」

「はい、もらいます」

私がそう言って手を出すと、その上に近藤君が飴を置いた。

「俺はね、小川さんの隣が結構好き」

「え？」

「なんか落ち着く。気つかわなくていいんだよね」
近藤君はそう言って笑うと部室を飛び出していった。
部室に1人、残された私は頭を抱えていた。
どうすればいいんだろう？
この気持ちは、どうしたらいい？
『近藤君のそのオレンジのにおいって好きなんです。』
私の微妙な告白に、近藤君は気づいただろうか？気づいていないのだろうか？
『小川さんの隣が結構好き』
この言葉を、喜んでもいい？
こんな風に顔を赤らめて、心臓をばくばくいわせて　喜んでしまってもいいですか？
「・・・やっぱ、好きだ」
小さな声で呟いて深呼吸をする。
まだかすかに、オレンジのにおいが残っていた。
私は手の中にあるオレンジの飴をそっとかばんにしまった。

食べてしまうのなんてもったいない。

近藤君、どうしたらいい？

この気持ちは、どうしたらいいの？

伝えても、いいですか？

桜の木がすっかり葉を落として、私達と同じように寒さに震える１１月のことでした。

（後書き）

なんか久しぶりの投稿です。
近藤君が春ちゃんをなんて呼んでるのかとか忘れていて、前のを読み返したりしました；；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1813d/

本の虫～１１月の図書館～

2010年10月20日19時25分発行